名古屋芸術大学研究紀要第44巻　149～162頁（2023）

# 音楽アウトリーチのためのアーティスト育成プログラムの開発
## ― 長久手市文化の家との連携による実践的アプローチ ―

*Development of a Training Program for Artists of Music Outreach Activities*
*― A Practical Approach in Collaboration with Nagakute Cultural Center ―*

梶田　美香　*KAJITA Mika*
（舞台芸術領域）

## 1．はじめに―音楽アウトリーチに関する動向―

### 1.1　導入への経緯

音楽分野のアウトリーチは、公立劇場や実演団体、芸術系大学、アートNPO等が実施主体となって、教育施設（学校や幼稚園等）や福祉施設（高齢者や障害者、保育園等）、医療施設（長期入院治療、院内学級、終末期医療等）等にアーティスト（演奏者や作曲家等）を派遣し、施設内でコンサートやワークショップ等を行う活動を指す。劇場の外で音楽活動が行われる館外活動ということになるが、その目的は芸術普及だけではなく、芸術以外の政策分野であるアウトリーチの実施先の運営目的に、音楽の側面からアプローチする伴走的なものも含まれることから、音楽アウトリーチは音楽の持つ本質的な価値と社会的価値の両者に着目して実施される活動と言える。

欧米で既に行われていた音楽アウトリーチは[1)]、我が国では1990年台前半を中心に急増した公立劇場へのハコモノ行政批判をきっかけとして始まった。この批判を受けた公立劇場が、立地する地域住民への公平な舞台芸術の分配手段としてとった手法が、アウトリーチである。アウトリーチに当初から積極的に取り組んだ公立劇場としては、和田山文化会館（兵庫県）や小出郷文化会館（新潟県）、長久手市文化の家（愛知県）などが挙げられ、たびたび研究論文等で紹介されている[2)]。その後、積極的に取り組む公立劇場が増加し、特に2001年に制定された文化芸術振興基本法（2017年に文化芸術基本法に改定）や、2012年に制定された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」で、アウトリーチに関連する内容が明記されて以後は、増加し続けている。実施率の推移は次の通りである。

1）林（2003）には、音楽分野における海外のアウトリーチがいくつか紹介されている。例えば、カーネギーホールやリンカーンセンターのホールによる実践事例や、ニューヨークフィルハーモニックなどのオーケストラによる事例、マンハッタン音楽院やジュリアード音楽院などの大学による事例、その他にもNPOによる事例などを調査した上で事例紹介している。

2）林（2003）は国内のアウトリーチ事情も調査しており、その中に、和田山文化会館や小出郷文化会館の事例が詳細に報告されている。

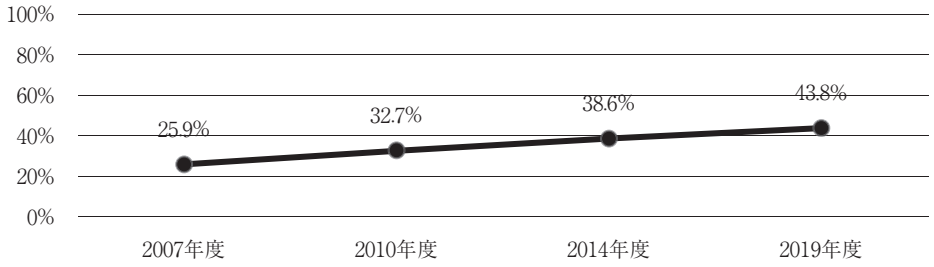


**図１　アウトリーチ実施率の推移**

「地域の公立文化施設実態調査」（一般財団法人地域創造、2008～2020）から筆者作成

### 1.2　政策の流れ

国の政策では、文化芸術振興基本法において、「学校教育における文化芸術活動の充実」（第３章第24条）が掲げられ、学校における文化芸術活動の充実や、文化芸術団体による学校での芸術活動に対する協力の支援が明記されたことが、アウトリーチに関連する法制度の初発となった。その後の「文化芸術の振興に関する基本的な方針」（2002年12月閣議決定）では、「学校教育においては，子どもたちが優れた文化芸術に直接触れ，親しみ，創造する機会を持つことができるよう，創造的な体験の機会の充実など，文化芸術に関する教育の充実を図る必要がある」と具体的に説明され、また第３次基本方針（2011年２月閣議決定）では、「文化芸術に関する体験型ワークショップを通じたコミュニケーション教育をはじめ，学校における芸術教育を充実する」（重点戦略３）と、アウトリーチの軸であるワークショップにも触れられ、具体的なイメージが示された。また、第４次基本方針（2015年閣議決定）では、「全ての子供や若者が，学校や地域において本物の文化芸術に触れ，豊かな感性や創造性，コミュニケーション能力を育む機会を充実することにより，次代の文化芸術の担い手や鑑賞者を育むとともに，心豊かな子供や若者の育成を図る」（重点戦略２）として、子どもの成長と文化芸術の関係性に対する姿勢も示された。

2017年の文化芸術基本法への改定を受けて2018年３月６日に閣議決定された文化芸術推進基本計画においても、「文化芸術活動に触れられる機会を、子供から高齢者まで、障害者や在留外国人などが生涯を通じて、あらゆる地域で容易に享受できる環境を整える」ことを促すために、「地域の学校，非営利団体，福祉施設等の関係機関等と連携したアウトリーチ活動」を行うように示されている（戦略４）。

### 1.3　これまでのプロセス

⑴　実践

①一般財団法人地域創造による公共ホール音楽活性化事業

1994年に設立された一般財団法人地域創造（当時は財団法人地域創造）が「アウトリーチのすすめ」と題する調査報告書を発表したのが、この用語の国内での初出に近い。この

ことからわかるように、我が国のアウトリーチの基盤を構築したのは、（一財）地域創造と言っても良いだろう。具体的には、「市町村等の公共ホールに、オーディションで選ばれた演奏家とコンサートの企画制作経験が豊富なコーディネーターを派遣し、地方公共団体等と共催でコンサートとアクティビティ（アウトリーチをはじめとする演奏家交流プログラム）を実施する」公共ホール音楽活性化事業（通称：おんかつ）を主軸として、公共ホール音楽活性化支援事業（通称：おんかつ支援）と公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業（通称：アウトリーチ・フォーラム）を合わせた３事業で公立劇場のアウトリーチをサポートしている。1998年から始まったこれら３事業の総事業数は、2021年４月の段階で757事業にのぼる[3)]。

我が国にはレジデンスアーティストを雇用している公立劇場が極めて少ないため、アウトリーチを実施する際には、まずアウトリーチに適したアーティストの選定が求められる。またアーティストを派遣する施設との調整、実施先の対象者に向けた内容の企画立案、少人数を対象に狭い空間で行うコンサートやワークショップの進行など、ホール空間での不特定多数の鑑賞者を対象に実施する日頃の舞台公演の企画制作とは異なる専門性が求められる。アウトリーチ導入期にはそういった専門性を劇場職員が身につけていなかったため、（一財）地域創造の３事業はアウトリーチ特有の業務を支援する目的で始められ、現在も継続されている。

②公立劇場の独自の取り組み

現在、アウトリーチに積極的に取り組んでいる公立劇場の中には、（一財）地域創造の支援をいち早く受けたことをきっかけにアウトリーチのノウハウを身に付け、支援終了後は自立してアウトリーチを行っている劇場もあるが、支援を受けずに手探りしながら独自の手法で取り組んできた劇場もある。例えば長久手市文化の家は、市内に立地する愛知県立芸術大学と長久手市との連携協定に基づき、在学生や卒業生との交流機会に恵まれていることを背景として、劇場職員とアーティストが協働で企画制作している（梶田・中村 2021）。

⑵　研究

①アウトリーチに期待されたパラダイムシフト

芸術と社会の関係にまつわる研究は、美学、音楽社会学、文化経済学、芸術経営学（アートマネジメント）など多様な側面から深められてきた中で、芸術は社会から隔絶された自律的な存在意義を有していると理解されてきた。しかし、その一方で経済的自立が困難であったことから、常に支援の対象であり、自律と依存のパラドックスの中にいると認識されてきた。

アウトリーチ研究における重要な視座は、芸術が支援を受ける立場から、地域社会の利

３）データは2020年度末時点。

益に資する立場へのパラダイムシフトが期待できると予知された点である。それは、実施先の施設の理念や目的を、芸術の備える創造的且つ自律的な視点からのアプローチによって達成に導くことが期待されたことによる。例えば教育分野においては、知識及び技術の習得とは異なる創造的思考がもたらす教育的効果への刺激、医療分野では、芸術による心理的変容がもたらす治療態度への刺激など、実施先施設の本来的な手法とは異なる角度からのアプローチが功を奏することが期待されたのである。

②教育分野を対象とした研究

先行研究においては、芸術以外の政策分野での効果に着目されることが多く、特に教育分野への注目は高かった。1990年代から2019年までのアウトリーチ研究の動向を見ると、全論文数111本に対し教育分野の研究は71本にのぼり（梶田 2021）[4]、学習指導要領の観点からみた効果を分析するために、教育方法や教育内容に関する質的研究が発表されている（小山 2009、梶田 2010、川添ら 2010、齋藤 2013）。教育分野へのアウトリーチを取り上げた研究論文の多さは、アウトリーチの実施先に教育機関が多いことや、教育機関での注目度の高さの反映であり、我が国のアウトリーチは教育機関への実施を中心として推し進められてきたとも言える。

より効果的に実施するための人材研究も、教育分野を想定したものが多い。アウトリーチの実施先となる学校の開拓や、学校の担当者との連絡調整、教員の希望を内容に取り入れるための調整を行うコーディネーターの必要性に触れられることも多く、現在も（一財）地域創造は、公共ホール音楽活性化事業の中で、公立劇場の企画担当者対象の研修を行なっている[5]。

③希薄なアーティスト育成研究

アウトリーチの教育的効果に関する研究（内容や方法）や、効果を発揮するための人材養成に関する研修（教育現場へのアウトリーチをスムーズに行うためのコーディネーター養成）が当初から継続的に行われてきた一方で、対象者の目の前に立って演奏やワークショップを行う人材であるアーティストについての研究は少なく、近年になってようやく徐々に増えてきた。アウトリーチ導入期は、アーティストの養成課程における閉鎖性を指摘した砂田（2007）の研究が目を引いたが、徐々に、アーティストのキャリア形成とアウトリーチの関係性に着目した研究（壬生 2013）、アウトリーチによるアーティストの意識変容を分析した研究（小井塚 2014, 2016）、アーティストにとってのアウトリーチの有意味性に関する研究（梶田、中村 2021）が発表されるようになった。

4）111本は、国立情報学研究所論文検索サイト CiNii で、「音楽」「アウトリーチ」で検索した論文数。「公共ホールとアウトリーチ活動の未来」（梶田、2019、一般財団法人地域創造「2019年度公共ホール音楽活性化し絵例指定都市アウトリーチセミナー事業」発表資料）による。

5）「令和３年度 公共ホール音楽活性化事業報告書」（一般財団法人地域創造 2022、p. 2）によると、「開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修」としての全体研修会と、公演事業の２～３ヶ月前に「担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言」を行う個別研修会が行われた。

しかし、至近距離の対象者とのコミュニケーション能力や、実施施設の目的や要望を取り入れた曲目構成等の企画力、単なる曲目紹介に終わらないファシリテーション能力などの必要性が問われているものの、現在までのアーティスト研究は、キャリアとの繋がりや社会への視野の広がりが中心であり、アウトリーチに求められる能力の育成方法や育成プログラム等の開発に焦点が当てられていない。要するに、育成についての研究は未着手に近い。

④アーティスト育成研究の希薄さがもたらす影響

公立劇場が行うアウトリーチは自主事業として行われるため、アーティストの起用は公立劇場側が意思決定する。しかし、起用後、公立劇場側は依頼内容の打ち合わせをアーティストと行って以後は、アーティストが企画制作を担ったプログラムに対して具体的な修正等の要望を伝えない状態で当日を迎えるという実態がある（梶田 2019）。このことから、公立劇場が目指すアウトリーチ、つまり、地域社会の利益に資するアウトリーチが、アウトリーチ専門教育を受けていないアーティストに一任され、その内容の検証がなされないままに実施先に提供されているということが推測される。

また、育成研究が行われていないことの影響は、アーティスト養成を担う芸術系大学へのアウトリーチ教育の導入の不十分さに繋がっていることも考えられ[6)]、将来、アウトリーチ活動を行いたいと考えている芸術系大学生にとって、学びの機会が得られない不利益が生じているとも言える。

### 1.4　本研究の動機と目的

本研究では、アウトリーチ研究の中でもとりわけアーティスト育成研究が遅れている実態に注目し、研究の遅れがもたらす影響を、地域社会の利益に資するアウトリーチが実施されていないのではないかという不安要素と、アウトリーチの学びの機会が供給されていないという芸術系大学生にとっての不利益性の二点と捉える。そして、このことに対する危機感を研究動機として、地域社会の利益に資するアウトリーチを実施する若手アーティスト育成プログラムの開発を目的とする。

### 1.5　本研究の方法と内容

本研究は、アウトリーチ事業実績の充実している長久手市文化の家の協力を得て、アウトリーチに関心の高い芸術系大学生を対象に、アウトリーチに向けた育成プログラムを実施する方法で行う。具体的には、アウトリーチの理念を学ぶ座学、企画制作したプログラムへの指導をアウトリーチの専門家から受ける演習、完成したプログラムによるアウト

6）国内でアウトリーチ科目を導入している大学は、東京藝術大学、滋賀大学（教育学部）、愛知県立芸術大学大学院、神戸女学院大学、昭和音楽大学、広島文化学園大学、名古屋芸術大学などが挙げられるが、導入していない大学も数多い。

リーチを小学校で行う実習の三部で構成される育成プログラムを芸術系大学生が受講し、最後には育成プログラム全体を振り返ることにより、①地域社会の利益に資するアウトリーチ内容となったか、②芸術系大学生がアウトリーチ能力を向上させたか、の二点を評価する。

## ２．実践

育成プログラムは、長久手市文化の家の協力を得て行い、芸術系大学生等を中心に受講生を一般公募した。育成プログラムのうち、講座、演習、振り返りはオンラインで一般公開し、小学校で実際に行ったアウトリーチ実習は非公開とした。

育成プログラムのタイトルは、キャリア構築のきっかけとなる意味も含め、「音楽家のためのキャリア講座―アウトリーチを通して―」とした。

### 2.1　概要

⑴　実施日と実施場所

表１　音楽家のためのキャリア講座―アウトリーチを通して―

| | 区分 | 実施日 | 実施場所 |
|---|---|---|---|
| Vol. 1 | 講座 | 2021年12月７日 | 長久手市文化の家からオンライン配信<br>＊希望者に公開 |
| Vol. 2 | 演習 | 2022年２月22日 | 長久手市文化の家風のホール<br>＊オンライン配信により希望者に公開 |
| Vol. 3 | 実習 | 2022年３月16日 | 長久手市立Ｘ小学校　音楽室<br>＊非公開 |
| Vol. 4 | 振り返り | 2022年４月17日 | 自宅等から zoom<br>＊オンライン配信により希望者に公開 |

＊講座と演習の間（2022年１月５日）に、講師と受講生の顔合わせをオンラインで実施した。

⑵　対象者

長久手市文化の家のホームページを利用して、2021年11月下旬から12月20日にかけて、芸術系大学生等を中心に一般公募した。その結果、４組の応募があり、申し込みの際に提出された演奏及び自己紹介動画と履歴・業績を確認した後、日程調整やヒアリングを通して１組を選考した。選考されたのは、愛知県立芸術大学に在学中の学生で結成された木管五重奏団「Wind Ensemble sola」であった。

構成メンバーは、フルート（４年生）、クラリネット（４年生）、オーボエ（４年生）、ホルン（４年生）、ファゴット（１年生）の５人であり、全員が現役の大学生となった。

写真１　Wind Ensemble sola

⑶　内容

①講座

講座タイトルを「今さら聞けない ?!　アウトリーチの基本のキ」とし、講師は、長久手市文化の家でアウトリーチ事業を担当するプロデューサー（生田創氏）と執筆者が担当した。内容は、アウトリーチの歴史的経緯、芸術普及活動との違い、教育分野への広がりの背景、関連する法制度、奏者に求められる心構えといった基礎的内容と、実習現場となる長久手市文化の家のアウトリーチ事業の説明とで構成した。事前に申し込みのあった希望者に対して、オンラインで公開した。

写真２　講座スライドの表紙

写真３　講座のオンライン配信の様子

②演習

タイトルを「実践！　どう創る ?!　アウトリーチの現場より」と題して長久手市文化の家（風のホール）でランスルー（通しリハーサル）を行い、ランスルー後、講師からの助言等を行なった。講師は、（一財）地域創造の登録アーティストとして公共ホール音楽活性化事業に長く関わり、現在は、同財団でアソシエイトアーティストを務めながら全国でアウトリーチ活動とアーティスト育成に取り組むピアニスト田村緑氏と、アウトリーチを積極的に学校教育に取り入れ、アウトリーチに関する研究論文も発表している東京学芸大学附属世田谷小学校教諭の齋藤豊氏、長久手市文化の家プロデューサーの生田創氏、執筆者の４名が務めた。事前に募集した希望者に向けてもオンラインで公開した。

写真４　ランスルーの様子（全体風景）

写真５　ランスルーの様子（一部）

③実習

長久手市文化の家のアウトリーチ事業「であーと」の一環で、長久手市立小学校４年生児童（３クラス87名）を対象に実際にアウトリーチを行った。

写真６　小学校での実習の様子

④振り返り

Wind Ensemble sola（メンバー５人）、講師（田村氏、齋藤氏、生田氏、執筆者）、長久手市文化の家職員、講座をサポートしたスタッフが、オンラインで振り返りの場を持った。

写真７　振り返り（オンライン）の様子

### 2.2　実施内容―演習を中心に―

本項では演習の詳細を取り上げ、Wind Ensemble sola に対して、どのような内容の助言がなされたのかを中心にみていく。

#### ⑴　演習

演習（２月22日）の事前（２月14日）に、Wind Ensemble sola の企画したプログラム、進行用の MC 原稿、具体的なタイムテーブルが提出された。演習時は提出されたプログラムと MC 原稿に基づいてランスルーが進められ、ランスルーに対して講師がコメントと質問をする形式で進められた。

ランスルーで演奏された曲目と、曲目構成に対する講師のコメントは表２、演奏曲、MC、動作等の全ての内容に対するコメントは表３にまとめた。

表２　曲目に対するコメント

| 事前提出提出（２月14日） | 講師のコメント |
|---|---|
| １．エルガー作曲「愛のあいさつ」 | ・２曲目から３曲目にどう繋げるのか。３曲目・４曲目の雰囲気と、２曲目の雰囲気の違いが気になる。<br>・「じゅんばん協奏曲」の楽しさに比べて「愛のあいさつ」の特徴が薄い。オープニングに工夫が必要。 |
| ２．石川亮太作曲「山の音楽家じゅんばん協奏曲」 | ・曲数を重ねていくたびに、一歩ずつ踏み込んでいく工夫をしてほしい。 |

| | |
|---|---|
| 3．イベール作曲「３つの小品より第１楽章」 | ・楽曲の組み合わせのコントラスト（区切り、メリハリ）がはっきりするように動いた方が良い。（イベールの時の動きが、その前の曲と同じ）<br>・何を積み上げた上でイベール（３曲目）に行くのかを明瞭にした方が良い |
| 4．ツェムリンスキー作曲「ユーモレスク」 | ・ツェムリンスキー（４曲目）までの積み上げがわかりにくいので、特別感が少ない。<br>・最後の終わり方について、どのようにしたいのかをもう一度話し合ってメンバーの意思統一してみてはどうか。例えば、じっくり鑑賞してほしいのか、楽しく盛り上がってほしいのか、など。最後の終わり方から逆算して組み立てていってほしい。 |

表３　全体に対するコメント

【時間配分】
・45分授業の枠になっているが、ランスルーの時間は35分だった。残りの10分について検討しなくてはならない。
・メインとなるイベールまで20分（全体の半分以上）使っているので、改善の余地がある。
・楽器のことや音のことなど、提示される情報量が多い。もう少し絞る必要がある。
・自己紹介、楽器紹介などが長い。

【子どもの目線・子どもとのコミュニケーション】
・初めて出会う子どもたちが、アーティストに親近感を持てるような情報が必要。例えば、授業でやっているリコーダー等を話題に出しても良い。
・木管五重奏の中での各楽器の役割を、言葉だけではなく可視化できるアイディアを考えると良い。可視化して理解を促進した上で、次に音楽の組み立てという段階に入っていく工夫をしてほしい。
・子どもが飽きないように動と静を組み合わせながら音楽の要素を散りばめるように工夫していくことで、メリハリがつくのではないだろうか。例えば、ホルンの音の出る仕組みをホースで表現したり、フルートではペットボトルで表現したりしていたのはわかりやすくてよかったが、全ての楽器でそれができるとさらに理解が深まり、次の段階に行きやすい。
・問いかけているものの、実際にはアーティストが説明している。子どもが答えていない。単純でも良いので、子どもが答えられるような質問をする。例えば、「この曲、知ってる？」などで良い。子どもは、自分で答えることで「自分のこと」として印象に残していく。
・アンサンブルの楽しさを説明しても、子どもたちは楽しそうなアンサンブルを傍観するのみになってしまうので、参加型のレポートリーも持っておくと良い。

【対象者リサーチ】
・子どもを知るために問いかけをするのは必要だが、「どうだった？」は禁句。
・アウトリーチの主役は子ども。アーティストが主役ではない。長久手市文化の家が子どもに伝えたい音楽像を体現するのがアーティストだから、そこを忘れないでほしい。

【アーティストとしての意識】
・子どもたちが音楽に触れる意義にどのように繋げるかを、アーティストとして考えてほしい。
・授業枠で実施するアウトリーチであっても、「教える」と思いすぎない方が良い。

【動き方】
・子どもから見てわかりやすい動き方（縦の動きより横の動き）を心がけるとよい。
・大きな楽器を持って動くと、無駄に目を引く時があるので気をつけてほしい。

(2)　実習

表４　実習において小学校で実際に演奏されたプログラム

| 実習での演奏プログラム（３月16日） | |
|---|---|
| １．ラヴェル作曲 | 「クープランの墓」より　リゴードン |
| MC①　楽器紹介 | 「どうやって音が鳴っているの？」 |
| ２．石川亮太作作曲 | 「山の音楽家じゅんばん協奏曲」 |
| MC②　楽器の役割の違い | 「曲ってどうやってできたの？」 |
| ３．ツェムリンスキー作曲 | 「ユーモレスク」 |
| MC③　アンサンブルの魅力 | 「合わせるってどういうこと？」 |
| ４．イベール作曲 | 「３つの小品より　第１楽章」 |

＊長久手市文化の家発行「ハレとケ vol. 14」（p. 2）より引用

２月22日の演習終了後、Wind Ensembke sola が改善案を検討した結果、表４のようなプログラムとなった。冒頭の演奏曲が、エルガー作曲「愛のあいさつ」からラヴェル作曲「リゴードン」（「クープランの墓」より）に変更となり、また３曲目と４曲目が入れ替わり、イベール作曲「３つの小品より　第１楽章」が最終曲となった。

## 2.3　評価

本項は、①地域社会の利益に資するアウトリーチ内容となったか、②芸術系大学生がアウトリーチ能力を向上させたかの二点を評価するため、2022年４月17日に行われた振り返りでのコメントをデータとしてピックアップする（表５、表６）。また、芸術系大学生の自己評価も重要であると考えられるため、コメントをピックアップする。

(1)　地域社会の利益にまつわるコメント

表５　振り返りでの地域社会の利益に関係するコメント

| 大カテゴリー | 小カテゴリー | コメント内容 |
|---|---|---|
| 子どもの変化 | 能動的な姿勢 | 途中でダブルリードを子どもたちの間に入って見せてあげたときに、みんなが前のめりだった。教師目線でみてよかったと思う。ツェムリンスキーの作品で、一部分をピックアップしたのは、聴かせ方が上手だったと思う。 |
| | コミュニケーション | 子どもたちとのインタラクティブな会話で、日常生活に引き込むことができたのではないかと思う。 |
| | 教科「音楽」への興味感心 | アンケートを見ると、音楽の授業が好きな子も好きではない子もいた。音楽の授業が好きになるきっかけになるとよい。 |
| 懸命な生き様 | アーティストの姿勢 | 本当に音楽が好きでやっていることが、子どもたちに伝わった。 |
| 劇場や市民との関係性 | 劇場との関係性 | 何回も劇場に通って、スタッフも味方につけた。 |
| | 市民に身近な存在 | 子どもたちが窓から手を振っていて、人気者になっていた。 |

⑵　芸術系大学生のアウトリーチ能力の向上にまつわるコメント

表６　振り返りでのアーティストのアウトリーチ能力向上に関係するコメント

| 大カテゴリー | 小カテゴリー | コメント内容 |
|---|---|---|
| アーティストの基礎 | 意欲 | 色々検討してやってみる挑戦の気持ち、前向きな姿勢がプログラムに表れていた |
| | 個性 | 一番、sola らしいと思ったのがイベールの作品。これから、個性が見える部分を広げていけると良い。 |
| | 積み重ね | 長い時間をかけてまとめてきたことに感心した。 |
| キャリア構築 | セルフマネジメント | “Be your own teacher” という言葉を贈りたい。自分で自分の先生になるために頑張って欲しい。 |
| | 選択肢のあるプログラム数 | 楽曲の魅力を引き出すプログラムだけではなく、展開形を創ってほしい。 |

⑶　Wind Ensemble sola のコメント

表７　アウトリーチ養成プログラム参加に対する芸術系大学生のコメント

| 大カテゴリー | 小カテゴリー | コメント内容 |
|---|---|---|
| 実習の価値 | 経験の積み重ね | MC は言葉の選択で伝わることが変わる。何回もやることでわかってくる。回を重ねるごとに楽しくアウトリーチができた。 |
| | 反応に対する感受 | やってきたことが伝われば良い反応となり、緊張していると子どもも緊張する。 |
| | 喜び | 子どもたちの素直な反応が嬉しい。 |
| | 理解 | 実際に本番で披露できたことでわかりやすくなった。 |
| | 成功への貪欲さ | ２月のランスルー後は、「なんとしてでも良いものにしたい」と思った。 |
| アウトリーチに対する興味 | キャリアとの関係 | これからどう活動していくかを考えるために、アウトリーチの仕事や、その世界の話を聞いてみたい |
| 講師 | 多様な視点 | 音楽をやっているからこその意見と、やっていないからこその意見があって、それらを取り入れることが良い経験となった。 |

## 2.4　考察

⑴　地域社会の利益

最も多く挙げられたコメントは、子どもの変化に関するものであった（表５）。能動的な姿勢を引き出したことや、子どもたちが親近感を感じるコミュニケーション、また、日頃の教科教育への好影響に対する期待など、学校生活における教育的効果への評価の高さは、地域社会の有する教育力の高さとして解釈することができる。

また、レジデンスアーティストのいない公立劇場が多いことに鑑みると、劇場職員との関係性が構築されている近隣在住のアーティストの存在価値は高い。特に、公立劇場が文化芸術の還元対象としている学校や児童に身近な存在であるということは高評価を得るこ

とがわかった。

学校教育における教育的効果と、劇場や市民にとっての身近さは、地域社会にとって利益だと評価されることが推測される。

⑵　芸術系大学生の能力の向上

最も多く挙げられたコメントは、アーティストとしての基礎をなす内容であった（表６）。意欲的に取り組むことや、アーティストとしての個性を明確にしていくこと、長期間に渡って研鑽を積むことなどが評価されている。ただ、これらのことは、アウトリーチに特化した内容ではないことから、日頃のアーティストとしての基礎的な研鑽が、アウトリーチに生かされることがわかった。さらに、自らをどのようにマネジメントするか、クライアントのニーズに応えられるように複数のプログラムを準備しておくといったことも、アーティストとしてのキャリア形成に必要な内容であり、これらがアウトリーチにおいても同様に重視されることがわかった。

⑶　芸術系大学生の自己評価

最も多く挙げられたコメントは、実習を通して感じられた内容であった（表７）。成功への貪欲な意欲を持った上で、目の前の子どもの反応を素早く感受し、試行錯誤の経験を繰り返すことが、アウトリーチの喜びや理解につながったようだ。育成プログラムにおいて、実習が重要であることがわかった。また、実習の前に行った演習が、実習の成功への意欲の高まりに繋げられたことが読み取れるコメントもあり、演習と実習の組み合わせが効果的だったことが推測される。

また、音楽だけではなく、学校教育や公立劇場運営の専門的見地からの意見が、学修成果に反映したことも自覚的に捉えられているようだった。

## ３．おわりに

本研究は、地域社会の利益に資するアウトリーチを実施する若手アーティスト、特に芸術系大学生の育成プログラムの開発を目的として、長久手市文化の家との連携による実践的アプローチで進めてきた。現段階での成果として、次のように整理する。

まず、地域社会への利益を、実施先の本来的な目的における利益と公立劇場としての役割から見た利益の二点とすることを前提とする。次に、それぞれの利益を担保した音楽アウトリーチのできるアーティストを育成するために、実施先、公立劇場、そしてアーティストの三方向の専門的知見が不可欠であると認識することが重要である。また、芸術系大学生に、実体験がもたらす成長を促すためには実際に対象者の前でアウトリーチを行う実習が必要であるが、実習に向けて具体的な改善策を練ったり、成功に向けての意欲をより向上させたりするためには、実習の前に演習が必要である。また、今回のコメントでは十

分に現れていなかったが、アウトリーチの効果を、三方向から見ていくことを理解するために、アウトリーチの基礎知識の修得として、座学による学びの必要性もある。

これらの整理は、今回の育成プログラムの流れが一定の効果を上げたと認識した上でのものだが、連携先の長久手市文化の家のようにアウトリーチ実績を十分に積み上げた公立劇場は決して多くないことに鑑みると、汎用性を備えた養成プログラムでは、養成対象にはアーティストだけではなく、公立劇場職員も含める必要があるのではないかと考えられる。このことは、今後の課題としていきたい。

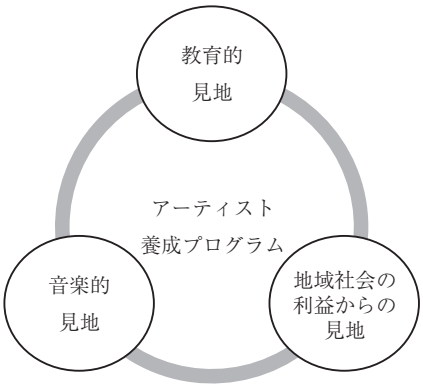


**図２　アウトリーチの専門人材としてのアーティスト養成プログラムに求められる専門的見地**

**謝辞**

本稿は、名古屋芸術大学特別研究費（令和３年度）の助成を受けて実施された。また、長久手市文化の家と任意団体「アウトリーチ・ラボ」の多大なる協力のもとに実施することができた。さらに、講座で講師を努めてくださったピアニストの田村緑氏、東京学芸大学附属世田谷小学校の齋藤豊氏には、講座開催にあたって多くのご示唆と貴重な資料も提供いただいた。各方面に心から感謝申し上げる。

## 参考文献

林睦「音楽のアウトリーチ活動に関する研究―音楽家と学校の連携を中心に―」、大阪大学文学研究科博士論文、2003年

一般財団法人地域創造「地域の公立文化施設実態調査」、2008年～2020年

梶田美香・中村由加里「音楽芸術分野のアーティストにとっての公立文化施設によるアウトリーチ活動の意味―インタビューの分析による検討―」『人間文化研究』36号、2021年、pp. 135-147

小山文加「学校音楽教育とアウトリーチ活動の関係を考える―学習指導要領を中心に―」『音楽芸術マネジメント』第１号、2009年、pp. 137-144

梶田美香「音楽科におけるアウトリーチの効果―小学校からの実践報告―」『学校音楽教育研究』第14巻、2010年、pp. 215-225

川添達也・小川容子「鑑賞授業における音楽アウトリーチ活動の実践研究」『島根教育大学臨床総合研究』９号、2010年、pp. 169-178

齋藤豊「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開：アウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試み」『日本音楽教育実践ジャーナル』vol. 10 no. 2、2013年、pp. 71-79

砂田和道「クラシック音楽におけるアウトリーチ活動とそれに関わる音楽家養成の問題」『文化経済学』第5巻第3号、2007年、pp. 87-99

壬生千恵子「音楽教育におけるアウトリーチを考える：キャリア教育の視点とアウトリーチ」『日本音楽教育実践ジャーナル』vol. 10 no. 2、2013年、pp. 63-70

小井塚ななえ「演奏家の変容にみるアートマネジメントの意義と可能性：コーディネーターと演奏家への聞き取り調査を通して」『音楽芸術マネジメント』第6巻、2014年、pp. 37-46

小井塚ななえ「演奏家の成長におけるアウトリーチの意義：事例分析と聞き取り調査を通して」、東京藝術大学博士論文、2016年

梶田美香「愛知県内における文化芸術の普及啓発に関する研究―小中学校への音楽アウトリーチを例に―」（愛知県芸術劇場）、2019年

## 参考記事等

一般財団法人地域創造ウェブサイト https://www.jafra.or.jp/（2022年11月9日確認）